

栄養学教育学会の意義と役割

一般社団法人日本栄養学教育学会理事長 中村丁次

平成25年9月1日、東京家政大学で行われた「日本栄養学教育学会総会」において、私が田中平三初代理事長の後を受け継ぐことになりました。この学会は、我が国には栄養教育に関する学会や研究会は存在するが、栄養学の教育学会がない背景の中で、栄養学と管理栄養士・栄養士の発展を願う多くの会員の熱い思いで準備、創設されました。栄養学は、18世紀ヨーロッパで生命科学の一部として誕生し、多くの研究者の努力によりエネルギー、タンパク質、脂質、炭水化物、ビタミン、ミネラルを軸に体系化が行われてきました。

我が国においては、大正10年、佐伯規博士により栄養研究所が設立され、大正13年、栄養学の実践家としてアジアで最初に栄養士が誕生しました。戦前、戦後を通して食糧事情の悪く、栄養学は、集団給食による合理的な食糧分配と徹底した栄養教育により、国民を低栄養から解放する論理的基盤になったのです。その後、食生活の欧米化と合理化が進み、過食、肥満、生活習慣病等の過剰栄養が出現しました。この頃から、人間側から栄養を考える必要が叫ばれるようになり、専門職として昭和37年に管理栄養士が誕生しました。21世紀の栄養のあり方が議論される中、平成15年、栄養士法改正により管理栄養士の役割や教育養成の内容が明確化され、管理栄養士はマネジドケアを基本とした傷病者に対する栄養の指導の専門職として位置づけられたのです。

現在、我が国には成人期の過剰栄養による肥満、生活習慣病と若年女子、高齢者、傷病者の低栄養状態が共存し、これらが同じ地域、同じ家族、さらに同じ人物に共存している「栄養障害の二重付加」を背負わされています。しかも、人々の栄養状態に影響を与える要因は複雑、多岐に渡っています。栄養問題は、新たな局面を迎えつつあるのです。現在のような栄養学の研究、教育、さらに実践活動でいいのでしょうか？ 1970年頃より、WHOを中心に医学教育に関するグローバルな検討が始まり、現在、教育プロセスは、社会のニーズから導き出される「教育目標」を定め、実現させる「方略」を決め、「評価」するというサイクルを持続的に動かしながら改善すべきだと考えられています。専門教育は、本来教員のためではなく学生と社会のために存在するのであり、もっと、もっと栄養のこれからの在り方を恒常的に議論する場が必要です。

今後、栄養学教育学会では、1) これからの栄養学及び栄養学教育学の在り方、2) 栄養学の研究者、教育者、管理栄養士、栄養士の制度や教育方法、4) 栄養に関わる社会環境、社会制度、法令、政策、5) 栄養学の教育、研究に関わる人間のあり方、用いられる施設、用具、さらに技法、6) 栄養学の歴史等に関する研究を進めて、今後のあるべき姿を議論したいと考えています。

志のある方々の入会を心から願っています。なを、今年の8月23日、神奈川県立保健福祉大学で第3回学術総会を開催します。ぜひ、ご参加下さい。